

インターネットリスクを減少させる情報リテラシー教育

- SNS利用におけるリスク -

Information literacy education for reducing online risks
- Risk factor of SNS usage -

市川 博¹, 本間 学²

¹大妻女子大学家政学部, ²中村学園大学栄養科学部

Hiroshi Ichikawa¹ and Manabu Honma²

¹Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

²Faculty of Nutrition Science, Nakamura Gakuen University

5-7-1, Beppu, Jonan-ku, Fukuoka-si, Fukuoka, Japan 814-0198

キーワード：インターネット, リクス, 情報リテラシー

Key words : Internet, Risk, Information literacy

抄録

インターネットの普及が急速に進み、その利用人口の増加が著しい。当初は特定なコンピュータを接続するクローズなネットワークであったが、現在では不特定多数のコンピュータを接続するオープンなネットワークとなり、携帯電話や家電、コンビニのPOSシステム、銀行決済、ネットショッピングなど、日常生活に必要なインフラとなっている。しかし、その利用にまつわるトラブルも頻発し、インターネット利用におけるリスクが増大している。インターネット利用における利用者個人のリスクとしては、ウイルス感染による個人情報の流出や詐欺等の被害の他、他者の権利侵害や名誉毀損などがある。これは現実社会でも同様に発生するが、インターネットの開放性とデジタル情報の特性により、伝達速度および被害の大きさ、終息処理の難しさにおいて現実社会とは大きく異なっている。本研究では、若者のインターネット利用がスマートフォンによるSNSが中心であることから、SNS利用におけるリスク要因を明らかにするために、質問紙による調査を実施した。

1. はじめに

不特定多数のコンピュータを接続するオープンなネットワークとしてのインターネットの普及が急速に進み、その利用人口の増加が著しい。現在では携帯電話や家電、コンビニのPOSシステム、銀行決済、ネットショッピングなど、日常生活に必要なインフラとなっている。利用者の増加に伴い、インターネット上のリスクは、それを利用する個人利用者における個人情報の流出や詐欺等の被害、他者の権利侵害や名誉毀損などの他、国や自治体、企業などの組織に対するサイバー攻撃や機密情報の流出なども社会問題となってきている。組織におけるリスク低減の対策はハードウ

エア、ソフトウェアの両面から検討されているが、リスクを根絶することはきわめて困難な状況である。

リスクを低減するためには組織を構成する職員、従業員のリスクに対する意識を高める必要性が指摘されている。個人利用のリスクである、個人情報の流出や詐欺等の被害に対しても、組織のリスク低減と同様、ハードウェア、ソフトウェア両面からの対策が必要となるが、その実施は個人のリスクに対する意識に依存する。

インターネットの社会的普及とそれに伴うソーシャル・ネットワーク・サービス(以下 SNS)の浸透は、誰でも情報の受発信に主体的に参加できる

メリットを生んだ一方で、対面的な現実社会におけるのと同様かそれ以上の社会的紛争事案の増加傾向を生み出すこととなった。インターネット環境での紛争事案は、他者の権利侵害や名誉毀損など対面的社会における事案と大差ないが、「フレーミング(炎上)」や拡散など、伝達速度と情報の質・量面での被害の大きさ、終息処理の難しさにおいて、極めて特殊である。公的機関や企業が危惧する紛争では、ネット利用者からの執拗な電話問い合わせ型の攻撃などが行われる例や、アクセスの集中による処理サーバの停止など、通常の業務に支障が及んだ例も枚挙に暇がない。

企業や公的機関および教育機関で、「ネットリテラシー」のためのカリキュラムが設定され、多様な対策は打たれている。しかしながら、現状の情報リテラシー教育や、ネット環境下での人権擁護を主題としたコンプライアンスのための行動規範が、その都度、姿形を変容させて生起する現実の問題に対応できているとは言い難い。ネット・トラブルについての数多の事案の報告は、この対策が極めて難しいものであることの証左である。組織におけるインターネットリスクの低減においても、個人利用のリスク低減においても、インターネットの特性を十分考慮したリテラシー教育が必要となる。

インターネット利用に伴うリスクや、モラルに関する研究は、ネットリテラシーや社会的スキルとの関係^[1]、知識と行動の不一致に関する研究^[2]、インターネット利用におけるリスク要因の調査^[3]など、様々な視点で検討され報告されている。本報では、若者のインターネット利用がスマートフォンによる SNS が中心であることから、SNS 利用におけるリスク要因を明らかにするために、質問紙による調査を実施した。

2. 調査の概要

2.1. 方法

(1)被験者

女子学生 110 名 (1 年～4 年生) である。

(2)実施方法、時期

Web を利用し、授業中に協力依頼を行い、PC 演習室にて任意の回答協力を得て実施した。調査にあたっては、結果は統計的に処理され、個人を特定して行うものでないことを説明し、回答者に不

都合な質問には回答しなくてもよいこととした。

実施時期は 2017 年 10 月である。

2.2. 質問項目

(1)スマートフォン、SNS の利用状況

スマートフォンの種類、利用時間、使用している SNS、SNS の利用目的、利用時期、などである。

(2)利用者の意識・行動

セキュリティリスクに遭遇しやすい利用者の行動や意識を調査するために、先行文献等を参考に、21 項目を作成し 5 件法で質問した^{[4][5]}。

(3)ながらスマホ利用

スマートフォンで SNS を使う場面を、以下の 13 項目を作成し当てはまるものを選択した (複数回答)。

①起床直後、②通学中、③食事中、④授業中、⑤アルバイト中、⑥入浴中、⑦就寝前、⑧トイレの中、⑨歩きながら、⑩テレビを見ながら、⑪学校の休み時間、⑫自宅で勉強しながら、⑬自転車に乗りながら

(4)SNS 利用の負担感

SNS を利用する際の悩み・負担になっていることを、以下の 13 項目のうち当てはまるものを選択した (複数回答)。

①SNS 内の人間関係

②ひんぱんにメッセージを投稿しなければいけないような気がする

③自分の個人情報やプライベートな事柄をどこまで書いて良いものか悩む

④他人の個人情報やプライベートな事柄をどこまで書いて良いものか悩む

⑤見ていない間に自分の悪口が書かれていないか心配になる

⑥知りたくもないのに人の行動がわかってしまうこと

⑦メッセージを読んだことがわかる機能(「既読チェック」など)があること

⑧メッセージがきたらすぐに返事を書かなければいけないこと

⑨友達とのやりとりをなかなか終わらせられないこと

- ⑩自分が書いてしまった内容について、後から「あれで良かったか」など悩む
- ⑪友達のメッセージをチェックすること
- ⑫悪意のあるコメントや荒らしが来ること
- ⑬自分の書いたメッセージに反応がないこと

(5) SNS トラブル経験

SNSによるトラブルの経験を以下12項目から選択した(複数回答)。

- ①あなたに対して直接悪口を書かれた
- ②知らないところであなたの悪口を書かれた
- ③画像を勝手に保存された
- ④写真を乱用された
- ⑤自宅を突き止められた
- ⑥あなたが書いたメッセージに対して、嫌な書き込みをされた
- ⑦知らない人から「会いたい」などのメッセージが来た
- ⑧相手が、自分の年齢や性別をいつわって、書き込みをしてきた
- ⑨自分の個人情報や写真などを無断で流された
- ⑩自分の名前やIDを、なりすましで使われた
- ⑪やりとりをしている相手とけんかになった
- ⑫いじめにあったり、無視(シカト)されたりした

(6) セキュリティに関するトラブル経験

セキュリティに関するトラブル経験を以下の16項目から選択した(複数回答)。

- ①コンピュータウイルスに感染した(感染後にセキュリティソフトが検出したケースを含む)
- ②システムやファイルが書き換えられたり、削除された
- ③全く知らない差出人から大量のメールが送られてきた
- ④メールに記載されたURLをクリックしたら、ブラウザが起動し個人情報の入力を求めるメッセージが表示された
- ⑤ホームページ閲覧中に、契約した覚えのない料金の支払いを要求するメッセージが表示された
- ⑥身に覚えのない料金の支払いを要求するメールが送られてきた
- ⑦知らない間に、銀行口座からお金が引き出された(不正送金を含む)知らない間に、クレジットカードが利用されていた

- ⑧知らない間に、自分のメールアドレスが詐称されて知り合いに送信されていた
- ⑨サービス提供者などから、個人情報流出の被害にあった知らない間に、自分のSNSアカウントで広告やメッセージが投稿されていた
- ⑩自分のパソコンから個人情報を流出させてしまった
- ⑪オンラインゲームで、ゲーム通貨を不正に搾取されたりアイテムを騙し取られた
- ⑫ネットオークションで、なりすまされて架空の商品が出品されたり、お金を振り込んだのに商品が届かなかった
- ⑬インターネットバンキングで、いつもと異なる認証画面が表示された
- ⑭電子マネー(プリペイドカード)の購入依頼メッセージを受け取った
- ⑮パソコンのファイルが勝手に暗号化され、開けなくなった
- ⑯急にパソコンの動作が重くなったり、動かなくなったりした

(7) セキュリティに関するリスク行動

SNS利用におけるセキュリティリスク、モラル違反などの以下の10項目のうち実際に行ったものを選択した(複数回答)。

- ①信頼のおける知り合いから来たメールに、災害に関する重要な情報なので複数の知り合いに転送してほしいとあったので、転送した。
- ②SNSやインターネットサービスのパスワードは、忘れないように複数のサービスで共通にしている。
- ③インスタグラムやツイッターなどのSNSで写真を投稿するとき、位置情報(GPS情報)をオンにしている。
- ④インスタグラムやツイッターなどのSNSで写真を投稿するとき、位置情報(GPS情報)をオンになっているかオフになっているか気にしていない(わからない)。
- ⑤企業訪問に行く時に、地下鉄の出口から目的地まで地図アプリを見ながら歩いていった。
- ⑥友人とテーマパークで撮った写真を、断りなしにインスタグラムやツイッターなどのSNSに投稿した。
- ⑦自宅のパソコンにセキュリティソフトがインストールされているかどうかわからない。

- ⑧町で見かけた、面白い格好をしている知らない人の写真を取って、インスタグラムやツイッターなどの SNS に投稿した。
- ⑨メールアドレスを変更しましたというメールが来たが、差出人がわからなかったので、返信して確認した。
- ⑩図書館や書店で、本の必要な一部をスマートフォンで写真を取って利用した。

3. 調査結果

3.1. SNS の利用状況

アンケート回答者の日常的に使用しているデバイスは 86.4%が iPhone, 11.8%が Android スマートフォン, WindowsPC は 1.8%であった。

スマートフォンの用途では, SNS を見る 107 人, SNS に投稿する 73 人, 無料通話をする 58 人, 動画サイトを見る 59 人, 音楽を聴く 79 人などとなり, SNS などのコミュニティサイトの利用が多い。SNS のサービスでは, LINE は 110 名全員が使用している。Twitter は 105 人, Instagram は 98 名であり, 複数の SNS サービスを利用している。Facebook は 29 人であり, 他の調査と同様, 若者の利用率は低い結果となった。

スマートフォンの 1 日あたりの使用時間は, 平均 5.8 時間であり, 3 名は 15 時間以上であった (図 1)。

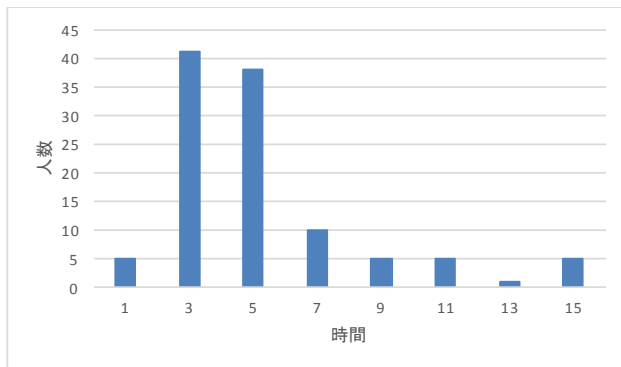


図 1 スマートフォン使用時間 (日)

スマートフォンを使うことで減った時間は睡眠が 82 人, 勉強が 71 人と日常生活に支障を来している状況がうかがえる (図 2)。

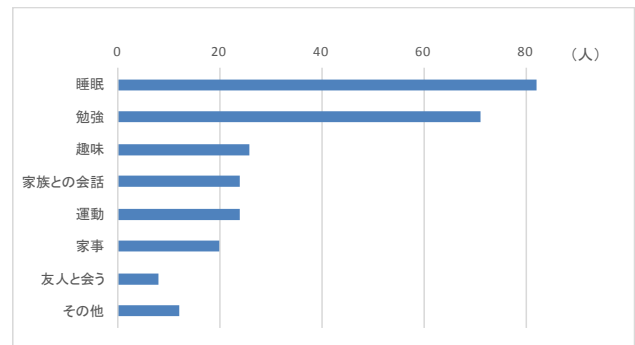


図 2 スマートフォンを使うことで減った時間

3.2. 利用者の意識・行動

セキュリティリスクに遭遇しやすい利用者の行動や意識を調査するために, 先行文献等を参考に, 21 項目を作成し 5 件法で質問した^{[4][5]}。質問に対し主因子法による因子分析を行った。因子数の決定は 3 因子から 5 因子までの分析を行い, 最適と判断された 3 因子についてバリマックス回転による因子分析を行った。その結果, 十分な因子負荷量を示さなかった 2 項目を除外し, 19 項目に対してバリマックス回転による因子分析を実施した。最終的な結果を表 1 に示す。

第一因子は, 「歩きながらスマホを使う」, 「食事中にスマホを使う」, 「スマホがないと不安になる」などの 9 項目が抽出された。第一因子は「スマホ中毒」の因子であると考えられる (寄与率: 15.73%, Cronbach $\alpha = 0.790$)。

第二因子は, 「友人に不満があっても言わない」, 「質問があっても言い出せない」, 「勉強を後回しにすることがある」などの 7 項目が抽出された。「優柔不断」因子と命名した (寄与率: 13.25%, Cronbach $\alpha = 0.756$)。

第三因子は, 「一緒にいられる仲間がいない」, 「私は孤独な人間である」など 3 項目が抽出され, 「孤独感」の因子と考えられる (寄与率: 11.24%, Cronbach $\alpha = 0.842$)。

表1 利用者の意識・行動の因子分析

	因子		
	スマホ中毒	優柔不断	孤独感
26歩きながらスマホを使う	.754	.149	.019
18食事中にスマホを使う	.684	.085	.226
19トイレでスマホを使う	.606	.065	.084
17朝起きたらスマホを使う	.558	.147	.015
23スマホが無いと不安になる	.530	.329	.115
22人と話しながらスマホを使う	.451	.105	.183
20入浴中にスマホを使う	.421	.168	-.059
25スマホで毎日SNSチェック	.396	-.170	-.036
24着信音で自分のスマホを見る	.380	.280	.161
31友人に不満があっても言わない	-.028	.711	.172
30質問があっても言い出せない	-.075	.670	.155
28勉強を後回しにすることがある	.216	.581	-.015
29将来のことを考えるのを後回し	.163	.575	.165
27課題がなかなか手につけられない	.393	.526	.018
15友人と共通している部分が多い	.101	.367	.028
32外出が億劫くなることがある	.166	.338	.242
33一緒にいられる仲間いない	-.021	.151	.758
35困っているときに助ける人いない	.141	.148	.770
34私は孤独な人間である	.144	.121	.832
負荷量平方和累積 (%)	15.73	28.98	40.22
Cronbach α	.790	.756	.842

(主因子法, バリマックス回転)

3.3. 因子と SNS 利用・行動の関係

因子分析より抽出された3つの因子と、SNS 利用状況に関する質問との関連を調べるために、因子得点を求め、SNS 利用状況との相関係数を求めた。SNS 利用状況は前述の、ながらスマホ利用に関する13項目、SNS 利用の負担感に関する13項目、SNS トラブル経験に関する12項目、セキュリティに関するトラブル経験に関する16項目、セキュリティに関するリスク行動に関する10項目について、該当する項目の合計値を求め、因子得点との相関係数を求めた(表2)。

表2 各因子と SNS 利用・行動

	1スマホ中毒	2優柔不断	3孤独感
ながらスマホ利用	0.666**	0.254**	0.284**
SNS利用の負担感	0.153	0.300**	0.134
SNSトラブル経験	0.268**	0.065	0.097
セキュリティに関するトラブル経験	0.244*	0.004	-0.043
セキュリティに関するリスク行動	0.144	0.140	-0.063

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

ながらスマホに関する質問項目を多く選択した被験者は、各因子との相関が高く、相関係数は有意水準1%で有意である。特にスマホ中毒の因子とは相関係数 0.666 と非常に高い。ながらスマホの質問項目が、スマホのながら利用と同一項目があることも関連しているが、スマホを常に携帯し、手放せない実態を表しているものと考えられる。また、優柔不断の因子との相関係数は 0.254 で、孤独感の因子との相関係数は 0.284 であった (有意水準1%で有意)。他に流されて、自分もスマホを使い、孤独感を埋めるためにスマホに没頭するという若者がいることを示唆している。

SNS の負担感、優柔不断の因子との相関係数が 0.300 有意水準1%で有意である。スマホの利用を負担に感じていても、なかなか利用をやめられないことを示している。

SNS トラブル経験は、スマホ中毒の因子との相関係数が 0.268 有意水準1%で有意である。また、セキュリティに関するトラブル経験も、スマホ中毒の因子との相関係数が 0.244 有意水準5%で有意である。スマホを手放せないで利用の多い被験者ほど、トラブルに遭遇する機会が増加するものと考えられる。

セキュリティに関するリスク行動に関しては、因子との相関が認められなかった。

4. おわりに

本研究では、若者のインターネット利用がスマートフォンによる SNS が中心であることから、SNS 利用におけるリスク要因を明らかにするために、質問紙による調査を実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 女子学生の 98% は、日常的な情報ツールとしてスマートフォンを利用し、その利用時間は1日平均5.8時間で15時間以上の者も3人いた。また、SNS によるコミュニケーションツールとしての利用が最も多かった。スマートフォンを利用することで減った時間は、睡眠時間、勉強時間が多く、日常生活に支障がでていることがうかがえる。
- (2) ながらスマホ利用は、スマホ中毒の因子、優柔不断の因子、孤独感の因子全てで相関係数が有意水準1%で有意となり、スマホを手放せない実態が明らかになった。
- (3) SNS 利用における負担感、優柔不断の因子

と相関係数が有意水準1%で有意となり、SNS利用に負担を感じても、利用をやめられない女子学生の存在を示している。

- (4) SNSトラブルの経験、セキュリティトラブルの経験はスマホ中毒の因子と相関係数が、それぞれ有意水準1%、5%で有意となり、スマホを手放せないで利用の多い学生ほど、トラブルに遭遇する機会が増加することを示している。

今回の調査では、セキュリティに関するリスク行動をとる個人の特性は明らかにできなかった。日常生活の倫理的な面が影響を与えている可能性もあり、スマホ利用の倫理面との関連をさらに調査し、個人の内的要因とリスク行動との関係を明らかにし、各自に合わせた教育支援ツールの作成を検討したい。

付記

本研究は、平成28年度大妻女子大学「戦略的個人研究費」(S2801G)の助成を受けた研究成果の一部である。

引用文献

- [1] 叶 少瑜, [他]. 大学生のメディア/ソーシャルメディア使用とネット・リテラシーとの因果関係, 及び社会的スキルと性別の効果. 日本教育工学会論文誌, 2016, 40(3), p.165-174.
- [2] 田中 孝治, [他]. 情報モラル行動における知識と行動の不一致に関する心理実験的検討. 日本教育工学会論文誌, 2016, 40(3), p.153-164.
- [3] 市川 博, [他]. インターネット利用におけるリスク要因 —メディアリテラシー教育プログラムの開発—. 人間生活文化研究, 2015, No.25, p.334-339.
- [4] 戸田 雅裕, [他]. 新しいスマートフォン依存尺度の開発. 日本衛生学雑誌, 2015, 70(3), p.259-263.
- [5] 栗原 久, [他]. 大学/短大1年生におけるスマートフォンの使用状況と「健康チェック票 THI」による健康度評価結果の男女差. 東京福祉大学・大学院紀要, 2015, 6(1), p3-10.

Abstract

The Internet today provides users with a great amount of convenience due to the improvement of tools and their functions, and the expansion in the numbers of users. However, with the expansion of both online content and time spent online, new and potential risks have emerged in this virtual space. This study reports the results of a self-report questionnaire used to examine the problems or difficulties encountered on the Internet by young women in Japan. It focuses on the risk factor of SNS usage.

(受付日: 2017年11月25日, 受理日: 2017年12月5日)

市川 博 (いちかわ ひろし)

現職: 大妻女子大学家政学部教授